

# 第120回定時株主総会招集ご通知に際しての インターネット開示事項

会計監査人に関する事項

業務の適正を確保するための  
体制および当該体制の運用状況

連結株主資本等変動計算書

連 結 注 記 表

株 主 資 本 等 変 動 計 算 書

個 別 注 記 表

(2021年4月1日から2022年3月31日まで)

2022年6月7日

**いすゞ自動車株式会社**

# 会計監査人に関する事項

(1) 会計監査人の名称 EY新日本有限責任監査法人

(2) 会計監査人の報酬等の額

当社が支払うべき当事業年度に係る会計監査人の報酬等の額	150百万円
当社および子会社が会計監査人に支払うべき金銭その他の財産上の利益の合計額	416百万円

- (注) 1. 百万円未満は、切り捨てて表示してあります。
2. 監査等委員会は、日本監査役協会の「会計監査人との連携に関する実務指針」を踏まえ、監査計画の内容、監査時間および配員計画、従前の事業年度における職務の遂行状況、報酬見積の算出根拠の妥当性等を検討した結果、会計監査人の報酬等について同意を行っております。
3. 当社と会計監査人との間の監査契約において、会社法に基づく監査と金融商品取引法に基づく監査の監査報酬等の額を明確に区分しておらず、実質的にも区分できませんので、報酬等の額にはこれらの合計額を記載しております。
4. 重要な子会社のうち、国内の子会社につきましてはEY新日本有限責任監査法人または有限責任監査法人トーマツが会計監査人となっており、また海外の子会社につきましてはErnst & YoungまたはDeloitte Touche Tohmatsuの監査を受けております。

(3) 非監査業務の内容

当社は、会計監査人から、子会社に関する決算事項や財務報告に関する内部統制の整備、運用および評価に係る助言を受けております。

(4) 会計監査人の解任または不再任の決定の方針

- ① 監査等委員会は、会計監査人の適格性もしくは独立性を害する事由の発生またはその他の理由により、会計監査人の適正な職務の遂行が困難であると判断した場合は、会計監査人を解任することまたは再任しないことを株主総会に提出する議案の内容として決定するものとします。
- ② 監査等委員会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれかに該当し、会計監査人の適正な職務の遂行に重大な支障が生じたと判断した場合は、監査等委員全員の同意により会計監査人を解任するものとします。

## 業務の適正を確保するための体制および当該体制の運用状況

当社が会社法および会社法施行規則に基づき取締役会で決議した「業務の適正を確保するための体制の整備に関する基本方針」および取締役会で確認した「運用状況の概要」は、次のとおりであります。

当社は、業務の適正を確保するための体制の構築の基本方針を次のとおりとし、これに基づき体制を整備・維持いたします。

### (1) 取締役および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するための体制

#### <決議の内容の概要>

- ・コンプライアンスの徹底を当社の最重要課題と位置付ける。なお、当社における「コンプライアンス」とは、法令遵守はもとより社会の信頼に応える高い倫理観をもって、全役員・従業員一人ひとり行動することとする。
- ・「コンプライアンスに関する基本的な取り組み方針」、「コンプライアンスに関する行動基準」を役員・従業員に周知徹底し、コンプライアンスの実効性を確保する。
- ・社外の有識者を委員として招聘した「コンプライアンス委員会」から、コンプライアンスの推進や体制整備についての客観的な助言・監督・評価を得て、法務部がコンプライアンスに係る事項を管理・推進し、各部門の代表者が出席する「コンプライアンス推進会議」を通じてその活動を全社に展開する。また、監査部が監査を行うことにより、コンプライアンスに係る内部監査機能を確保する。
- ・取締役会の業務執行監督機能の客観性・中立性・透明性を高めるため、独立した立場の社外取締役を置く。
- ・反社会的勢力や団体との一切の関係を遮断し、不当な要求等を拒否するため、毅然とした態度で対応する。

#### <運用状況の概要>

- ・コンプライアンス委員会を開催し、当社のコンプライアンス施策への助言、監督、評価および社外弁護士事務所に設置した目安箱（ヘルプライン）へ通報された事案への対応を行った。
- ・社内でのコンプライアンス活動の実効性を高めるため、役員および従業員にコンプライアンス・ガイドブックを配付し、方針や基準について周知徹底している。
- ・各部門に設置したコンプライアンス推進者をメンバーとするコンプライアンス推進会議を定期的で開催し、施策の社内展開を図るとともに、各部門における活動状況の把握を行っている。
- ・反社会的勢力や団体との関係遮断について、全ての国内法人との間の契約書に、反社会的勢力排除条項を盛り込んでいる。

## (2) 取締役の職務の執行に係る情報の保存および管理に関する体制

### <決議の内容の概要>

- ・法令および「取締役会規則」その他の社内規則に従い、取締役会議事録その他の取締役の職務執行に関する情報について、情報ごとにこれを保存および管理すべき主管部署を定め、当該主管部署において、これを適切に保存および管理するとともに、秘密情報については、法令および「秘密情報取扱規則」に従い、秘密情報管理統括責任者が、これを適切に管理する。
- ・情報管理および情報セキュリティ管理については、各部門によるセキュリティ対策実施状況をグループCISO（情報セキュリティ責任役員）および各部門代表者からなる「情報セキュリティ統括会議」が評価し、必要に応じグループCRMO（リスクマネジメント責任役員）と連携することによって適切な情報管理体制を敷き、その状況について適宜取締役会に報告することにより、情報管理を徹底する。

### <運用状況の概要>

- ・法令および取締役会規則に則り、取締役会議事録を適切に保存および管理している。その他取締役の職務執行に関する情報については、秘密情報取扱規則等の社内規則に従い、主管部署において、これを適切に保存および管理している。
- ・複数の協業パートナーとの協業プロジェクトを同時進行するにあたり各協業パートナーから得た秘密情報の混同または漏洩を防ぐため、協業情報取扱規則を新たに制定し、役員および従業員にその順守を徹底させるための教育を実施した。
- ・情報セキュリティ管理に関し、グループCISOのもと、情報セキュリティ関連の社内規則および情報セキュリティ管理体制が整備されており、当該規則および体制について役員および従業員への教育を実施した。
- ・各部門は情報セキュリティに関する施策を実施し、また、当該規則に基づく管理状況を確認し、グループCISOおよび各部門代表者からなる情報セキュリティ統括会議で実施結果を確認した。

## (3) 損失の危険の管理に関する規程その他の体制

### <決議の内容の概要>

- ・「リスク管理規程」に従い、3線防御体制に基づき、各部門統括がリスクオーナーとして業務執行を通じグループ企業を含む当該部門リスク対応を行い、グループCRMOが各部門のリスク対応を管理し、監査部が部門・グループCRMOから独立した形でリスク管理体制や仕組みの合理性を判断する。
- ・グループCRMOは、「リスク管理確認会議」を定期的に主催し、リスク対策の進捗状況、顕在化したリスクを把握し、対策やリスク認識の不断の見直しを行う。そのリスク管理状況については、取締役会にて定期的に把握・評価し、また、危機に際しては、グループCRMOが責任者となり、その対応（体制を含む。）を決定・実施し、取締役会に報告することにより、リスク管理を徹底する。

### <運用状況の概要>

- ・リスク管理規程を改訂し、3線防御体制をベースとしたグループCRMOによるリスク管理体制を強化するとともに、同規程に基づき、定期的にPDCAサイクルを回す計画で活動を実施し、グループCRMOが定期的に主催するリスク管理確認会議においても、リスクの把握や対応体制を含むリスク対策進捗状況の確認を実施した。中でも新型コロナウイルス感染症、サプライチェーンおよび国際情勢に関するリスクの把握や対策状況についても確認したが危機対応に至る事象の発生はないものの、今後も要注意事象として継続注視する。
- ・経営会議において、リスク管理確認会議の結果を含む当事業年度の全社リスク管理対応実績の情報共有と評価を四半期ごとに実施し、取締役会は、その結果の報告を受けた。

#### (4) 取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

##### <決議の内容の概要>

- ・会社法第399条の13第6項および定款第25条の規定により、重要な業務執行の決定の全部または一部を取締役に委任する。取締役会からの委任を受けた取締役は、「決裁基準規則」およびその他の規則に従い、重要な業務執行を決定する。
- ・取締役会は、取締役による業務執行の決定の指針となる中期経営計画等の経営の基本方針を策定するとともに、取締役がそれに沿った決定をしているかモニタリングする。
- ・取締役の業務執行を適切にサポートする体制として執行役員およびグループCxO（分野別最高責任者）を任命する。

##### <運用状況の概要>

- ・重要な業務執行の決定を取締役会から取締役に委任するとともに、決裁基準規則を改訂し経営会議およびその下部会議体に対する権限委譲を進め、業務を効率的に執行した。
- ・取締役の業務執行の状況は、原則毎月1回および必要都度開催される取締役会場で報告され、取締役会は、取締役が経営の基本方針に沿った意思決定をしていることを確認した。
- ・取締役会により選任された各執行役員および各グループCxOは、取締役会が委任した業務を適切かつ効率的に執行した。

#### (5) 当社およびその子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

##### <決議の内容の概要>

- ・当社および当社グループが社会からその存在価値を認められ、信頼を得るために、「グループ企業理念」、「グループ行動指針」および「コンプライアンスに関するグループ行動基準」を策定し、当社グループの全役員・従業員が上記「グループ企業理念」、「グループ行動指針」および「コンプライアンスに関するグループ行動基準」を踏まえた行動をとるよう適切に対応する。
- ・当社グループ各社に対し、当該各社に応じた適切なコンプライアンス体制の整備とコンプライアンスの徹底を要請するとともに適切なリスク管理体制の整備やリスク対応を要請する。
- ・「グループ企業管理規程」および「グループ企業管理細則」を制定し、当社グループの業務の適正を確保する体制の強化に対応する。
- ・当社経営幹部による、当社グループ各社の経営幹部に対する当該各社の経営状況のモニタリングを継続的に実施するとともに、当該各社のコンプライアンスの状況、リスク管理状況および業務の効率性を確保する体制についても報告を受け、改善すべき点があると認められた場合には、改善を要請する。
- ・金融商品取引法に基づく財務報告の信頼性を確保するための体制を敷く。

##### <運用状況の概要>

- ・グループ企業理念、グループ行動指針およびコンプライアンスに関するグループ行動基準を制定し、グループ企業が遵守するように徹底を図っている。
- ・グループ企業に対するコンプライアンス推進活動として、国内グループ企業各社のコンプライアンス担当者をメンバーとしたグループ企業コンプライアンス推進会議を原則毎月開催し、グループ企業各社のコンプライアンス体制の整備を推進するとともに、各社間での情報交換によるグループ全体のコンプライアンスのレベルアップを行った。
- ・グループ企業に対するリスク管理活動として、国内外のグループ企業各社に対して、リスクアセスメントやリスク管理体制整備を推進し、グループ全体のリスク管理のレベルアップに着手した。
- ・グループ各社の経営状況について、当社経営幹部による各社の経営幹部に対する年次ヒアリングを各社毎に年1回実施し、合わせて当該各社のコンプライアンスの状況、リスク管理の状況および業務の効率性を確保する体制についても報告を受けた。
- ・財務報告に係る内部統制の有効性について、金融庁の実施基準に基づく全社的な内部統制および業務プロセス統制の整備および運用状況の評価を実施しており、当該評価の結果、当事業年度末日時点において、当社の財務状況に係る内部統制は有効であると判断した。

**(6) 監査等委員会がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項**

**<決議の内容の概要>**

- ・ 監査等委員会からの要請に従い、当社の社内組織として「監査等委員会グループ」を設置し、監査等委員会の職務を補助すべき使用人を配属する。

**<運用状況の概要>**

- ・ 監査等委員会グループを設置し、専任者を含む複数の補助使用人を配属している。業務の内容は監査の実効性確保を目的とした監査等委員会の職務の補助であり、監査等委員会監査に係る庶務事項ならびに監査等委員会および経営監査会議の事務局業務等もやっている。

**(7) 監査等委員会の職務を補助すべき使用人の取締役からの独立性および当該使用人に対する指示の実効性の確保に関する事項**

**<決議の内容の概要>**

- ・ 監査等委員会の職務を補助すべき使用人の取締役（監査等委員である取締役を除く）からの独立性および当該使用人に対する指示の実効性を確保するために、当該使用人を監査等委員会の指揮命令下に置くとともに、その人事異動、人事考課および賞罰について監査等委員会の事前同意を得る。

**<運用状況の概要>**

- ・ 監査等委員会補助使用人規則を制定し、監査等委員会グループ所属員の取締役（監査等委員である取締役を除く）からの独立性の確保を定めている。
- ・ 監査等委員会グループ専任の所属員の配属、異動および人事考課について、事前に監査等委員会の意見を聴取し、監査等委員会の同意を得て実施している。

**(8) 当社およびその子会社の取締役および使用人等が監査等委員会に報告をするための体制**

**<決議の内容の概要>**

- ・ 監査等委員会に対し、当社および当社グループ各社の取締役（監査等委員である取締役を除く）および執行役員その他これらに相当する者ならびに従業員が、適宜、当社および当社グループ各社の業務執行の状況および経営状況その他監査等委員会と協議して定める事項を報告するとともに、監査等委員会の求めに応じて、随時、必要かつ十分な情報を監査等委員会に開示し、または報告する体制を敷く。
- ・ 当社の監査等委員会および当社グループ各社の監査役が相互に連携して当社グループ全体の監査の充実・強化を図ることを目的として定期的に開催する連絡会に対し、適宜協力を行う。

**<運用状況の概要>**

- ・ 監査等委員会が定めた当事業年度監査計画および監査等委員会監査の実効性確保に関わる要望事項は、取締役会に報告され、取締役（監査等委員である取締役を除く）に対し監査等委員会監査への理解と協力が要請された。このなかで、常勤の監査等委員は経営会議等重要な会議へ必要に応じて出席することとし、また、監査等委員会への報告等に関する体制として、監査等委員会との協議により定めた定例的または臨時的に報告すべき事項や、内容の定期聴取や閲覧を求める会議議事録、資料等が具体的に提示され、これらの事項は監査等委員会の日常監査において円滑に実施された。
- ・ 監査等委員会から説明や報告の要求があれば応じるように、取締役（監査等委員である取締役を除く）および使用人に周知しており、必要に応じて監査等委員会に速やかに説明や報告を行った。
- ・ 特定の国内グループ企業の常勤監査役と当社の常勤の監査等委員をメンバーとするいすゞグループ常勤監査役連絡会を定期的に開催し、いすゞグループにおける監査等委員会監査および監査役監査の進め方に関する共有化および情報交換が行われた。

**(9) 監査等委員会に報告をした者が当該報告をしたことを理由として不利な取扱いを受けないことを確保するための体制**

**<決議の内容の概要>**

- ・前項に基づき監査等委員会への報告を行った者に対し、当該報告を行ったことを理由として不利な取扱いを行うことを禁止し、その旨を当社および当社グループ各社の役員・従業員に周知徹底する。

**<運用状況の概要>**

- ・監査等委員会への報告を行った者に対し、当該報告を行ったことを理由として不利な取扱いを行うことの禁止を周知徹底しており、当該理由で不利な取扱いを行った事例は確認されていない。

**(10) 監査等委員会の職務の執行について生ずる費用の前払または償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用または債務の処理に係る方針に関する事項**

**<決議の内容の概要>**

- ・監査等委員である取締役がその職務の執行について、当社に対し、費用の前払、償還または債務の弁済の請求等をしたときは、法令に基づいて、速やかに当該費用または債務を処理する。
- ・監査等委員である取締役の職務の執行について生ずる費用等を支弁するため、毎年、適切な予算を確保する。

**<運用状況の概要>**

- ・監査等委員である取締役の職務の執行について生ずる費用について、発生後円滑に支払った。
- ・あらかじめ計上された予算を緊急または臨時に超える場合、監査等委員である取締役がこれを会社に請求することが出来る体制が整えられている。

**(11) その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制**

**<決議の内容の概要>**

- ・監査部のレポートライン（報告経路）について、取締役社長へのレポートラインに加え、監査等委員会にも直接のレポートラインを確保する。
- ・監査部長および指揮命令系統において監査部長の上位に属する役職者の人事異動について監査等委員会の事前同意を得る。
- ・監査等委員である取締役が経営会議へ出席する機会を確保する。
- ・その他監査等委員会の監査が実効的に行われることを確保するための体制を整備するために、今後とも監査等委員会と継続的に協議するとともに、当該協議を通じて監査等委員会から要請された事項については、これを実現するために必要な措置を講ずるよう努める。

**<運用状況の概要>**

- ・監査部は、「内部統制システム」の基本方針に則り、活動状況を適切に取締役社長及び監査等委員会に報告している。
- ・監査等委員会は、監査等委員会監査が実効的に行われることを確保するために、取締役社長と定期的に会合し、監査実施状況の報告、経営方針および経営課題等の聴取等を行い、取締役（監査等委員である取締役を除く）から職務執行状況を聴取し、監査等委員会の立場から積極的に意見を述べている。
- ・内部統制の監査に係る三者連絡会（監査等委員会、会計監査人、監査部）を定期的に開催し、それぞれの監査計画とその実施状況について、情報と意見交換を行ったほか、内部監査結果や会計監査結果等について適宜報告を受けるなど、関係を強化している。

# 連結株主資本等変動計算書 (2021年4月1日から2022年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	40,644	42,599	849,673	△54,090	878,826
連結会計年度中の変動額					
剰余金の配当			△37,314		△37,314
親会社株主に帰属する当期純利益			126,193		126,193
土地再評価差額金の取崩			△71		△71
自己株式の取得				△2,259	△2,259
自己株式の処分		△10,109		53,059	42,949
利益剰余金から資本剰余金への振替		10,109	△10,109		－
非支配株主との取引による資本剰余金の増減		7			7
株主資本以外の項目の連結会計年度中の変動額(純額)					
連結会計年度中の変動額合計	－	7	78,698	50,800	129,505
当期末残高	40,644	42,606	928,371	△3,290	1,008,332

	その他の包括利益累計額						非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	52,942	△796	83,881	7,830	△901	142,955	183,230	1,205,013
連結会計年度中の変動額								
剰余金の配当								△37,314
親会社株主に帰属する当期純利益								126,193
土地再評価差額金の取崩								△71
自己株式の取得								△2,259
自己株式の処分								42,949
利益剰余金から資本剰余金への振替								－
非支配株主との取引による資本剰余金の増減								7
株主資本以外の項目の連結会計年度中の変動額(純額)	1,048	△305	71	41,629	370	42,813	17,093	59,906
連結会計年度中の変動額合計	1,048	△305	71	41,629	370	42,813	17,093	189,411
当期末残高	53,990	△1,102	83,952	49,459	△531	185,768	200,324	1,394,425

(注) 記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示してあります。



## 連結注記表

### 連結計算書類作成のための基本となる重要な事項に関する注記

#### 1. 連結の範囲に関する事項

- |                  |  |
|------------------|--|
| (1) 連結子会社の数      | 100社   |
| (2) 主要な連結子会社の名称  | いすゞ自動車販売(株)<br>いすゞ自動車近畿(株)<br>いすゞ自動車首都圏(株)<br>UDトラックス(株)<br>いすゞ モーターズ アメリカ エルエルシー<br>泰国いすゞ自動車(株)   |
| (3) 連結の範囲の変更     | ①UDトラックス(株)、(株)ニューメック、UDフィナンシャルサー<br>ビス(株)、UD Trucks Singapore (PTE.) Ltd.、UD Trucks<br>India Private Limited、UD Trucks Malaysia SDN BHD、UD<br>Trucks(Thailand) Co., Ltd.、UD Trucks Corporation<br>(Thailand) Co., Ltd.、TMBP Ltd.、Thai-Swedish Assembly<br>Co., Ltd.、TSA Land Co., Ltd.、UD Trucks North America,<br>Inc.、UD Trucks Business Services (Tianjin) Co., Ltd.、UD<br>Trucks Southern Africa (Pty) Ltd.及びUD Trucks Middle<br>East FZEは、株式の取得により連結の範囲に含めています。<br>②いすゞ・やまとエンジン(株)はいすゞ自動車エンジン販売(株)に、<br>アイパック(株)はいすゞライネックス(株)に吸収合併されたため連結<br>の範囲から除外しています。<br>③(株)トラックサービス北海道は清算手続きが完了したため、連結<br>の範囲から除外しています。 |
| (4) 主要な非連結子会社の名称 | いすゞモーター北海道(株)  |
| (5) 連結の範囲から除いた理由 | 非連結子会社は、いずれも小規模であり、また、総資産・売上高<br>ならびに当期純損益・利益剰余金(持分相当額)等の合計額が連結<br>会社の総資産・売上高ならびに当期純損益・利益剰余金(持分相<br>当額)等に占める割合はいずれも僅少であり、連結計算書類に重<br>要な影響を与えないため連結の範囲から除外しています。  |

#### 2. 持分法の適用に関する事項

- |                   |  |
|-------------------|--|
| (1) 持分法適用会社の数     | 54社  |
| (2) 主要な持分法適用会社の名称 | いすゞ保険サービス(株)<br>ジェイ・バス(株)  |
| (3) 持分法の適用範囲の変更   | ①UDトラックス道東(株)、UDトラックス新潟(株)及びPT UD<br>Astra Motor Indonesiaは、株式の取得により持分法適用の関連<br>会社としています。<br>②Isuzu Motors Sweden ABは、新規設立により持分法適用の関 |

連会社としています。

- (4) 持分法を適用しない主要な非連結子会社及び関連会社の名称  
非連結子会社 いすゞモーター北海道㈱  
関連会社 鈴木運輸㈱

- (5) 持分法を適用しない理由 上記の非連結子会社及び関連会社については、いずれも連結計算書類に及ぼす影響が軽微であり、かつ全体としてもその影響の重要性が乏しいため、持分法適用の範囲から除外しています。

### 3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、国内子会社3社、在外子会社31社の決算日は、主として12月31日です。連結計算書類の作成にあたっては、決算日現在の計算書類を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については、連結上必要な調整を行っています。また、国内子会社29社、在外子会社37社の決算日は連結決算日と一致しています。

### 4. 会計方針に関する事項

- (1) 有価証券の評価基準及び評価方法  
その他有価証券

- ①市場価格のない株式等以外のもの 時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）  
②市場価格のない株式等 移動平均法による原価法

- (2) 棚卸資産の評価基準及び評価方法

- ①連結計算書類作成会社 総平均法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)  
②連結子会社 主として、個別法による原価法(貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

(3) デリバティブの評価基準及び評価方法

時価法

(4) 固定資産の減価償却の方法

①有形固定資産

(リース資産を除く)

主として、定額法。一部、定率法によっています。

②無形固定資産

(リース資産を除く)

定額法。なお、無形固定資産に含まれる「ソフトウェア」の減価償却方法は、社内における利用可能期間（5年間）に基づく定額法によっています。

③リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法を採用しています。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取り決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のは零としています。

(5) 重要な引当金の計上基準

①貸倒引当金

売上債権、貸付金等の貸倒損失に備えるため、当社及び国内連結子会社は、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しています。また在外連結子会社は、個別判定で計上しています。なお、連結会社相互の債権・債務を相殺消去したことに伴う貸倒引当金の調整計算を実施しています。

②賞与引当金

従業員の賞与支給に充てるための引当であり、当連結会計年度に負担すべき支給見込額を計上しています。

③役員賞与引当金

役員の賞与支給に充てるための引当であり、当連結会計年度に負担すべき支給見込額を計上しています。

④製品保証引当金

製品のアフターサービスに対する費用の支出に充てるための引当であり、保証書の約定に従い、過去の実績を基礎にして計上しています。

⑤メンテナンス引当金

リース契約等に基づき、リース期間中に発生が見込まれるリース車両整備費用等のメンテナンス原価の支出に備えるため、発生見込総額のうち既経過リース期間に対応する額を計上しています。

⑥役員株式給付引当金

取締役等への当社株式の給付に充てるための引当であり、当連結会計年度に負担すべき給付見込額を計上しています。

(6) 重要な外貨建の資産または負債の本邦通貨への換算基準

外貨建債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しています。なお、在外子会社等の資産及び負債は、在外子会社等の決算日の直物為替相場により円貨に換算し、収益及び費用は期中平均相場により円貨に換算し、換算差額は純資産の部における為替換算調整勘定及び非支配株主持分に含めています。

(7) 重要なヘッジ会計の方法

①ヘッジ会計の方法

- a. 為替予約及び通貨オプション  
振当処理（要件を満たしていないものを除く）
- b. 金利スワップ、金利オプション  
繰延ヘッジ処理または金融商品に関する会計基準に定める特例処理

②ヘッジ手段とヘッジ対象

- a. ヘッジ手段  
金利スワップ、金利オプション、為替予約取引、通貨オプション
- b. ヘッジ対象  
外貨建債権債務、借入金

③ヘッジ方針

当社は、将来の市場価格の変動に対するリスクヘッジとしてデリバティブ取引を導入しており、外貨建債権債務、借入金の範囲で利用しています。

④ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ手段の変動額の累計額とヘッジ対象の変動額の累計額を比較して有効性の判定を行っています。ただし、特例処理によっている金利スワップについては有効性の評価を省略しています。

⑤その他

当社内にはデリバティブ取引に関する内規があり、内規には取引の目的、内容、保有限度、報告体制等を定めており、これに基づいて取引及びリスク管理を行っています。

(8) 重要な収益及び費用の計上基準

①ファイナンス・リース取引に係る収益の計上基準

リース料受取時に売上高と売上原価を計上する方法によっています。

②収益及び費用の計上基準

当社グループは、国内外において、大型トラック・バス（以下「大型・中型車」）、小型トラック・ピックアップトラック及びその派生車（以下「小型車他」）といったCV・LCVのほか、海外生産用部品並びにエンジン、トランスミッション及び駆動系のコンポーネントを中心としたパワートレイン（以下「エンジン・コンポーネント」）、部品の販売、整備・サービス及び中古車の販売等（以下「その他」）を主要な事業としています。

国内向けの大型・中型車、小型車他、エンジン・コンポーネント及び部品等の販売については、顧客が当該製品に対する支配を獲得し履行義務が充足される、主に引渡時等に収益を認識しています。海外向けの大型・中型車、小型車他、海外生産用部品、エンジン・コンポーネント及び部品等の販売については、顧客が当該製品に対する支配を獲得し履行義務が充足される、製品を船積みした時点等に収益を認識しています。

整備・サービス及び中古車の販売等については、サービス提供が完了した時点又は顧客が当該製品に対する支配を獲得し履行義務が充足される、引渡時等で収益を認識しています。

(9) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、その効果の発現する期間を見積もり、原則としてその計上後20年以内の期間で定額法により償却を行っています。

(10) その他連結計算書類作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る負債の計上基準

退職給付に係る負債は、従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における見込額に基づき、退職給付債務から年金資産を控除した額を計上しています。なお、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっています。過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として10年）による定額法により費用処理しています。数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（主として10年）による定額法または定率法により按分した額をそれぞれ発生翌連結会計年度から費用処理しています。

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しています。

## 5. 会計方針の変更

(収益認識に関する会計基準等の適用)

「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識しています。

これにより、従来は販売費及び一般管理費として計上していた販売手数料等の顧客に支払われる対価の一部について、取引価格から減額する方法に変更しています。また、当社の子会社が代理人として行う取引について、従来は顧客から受け取る対価の総額を収益として認識していましたが、顧客から受け取る額から仕入先に支払う額を控除した純額で収益を認識することとしています。さらに有償支給取引について、従来は有償支給した支給品について消滅を認識していましたが、支給品を買い戻す義務を負っている場合、当該支給品の消滅を認識しない方法に変更しています。

この結果、当連結会計年度の売上高が9,601百万円、売上原価が2,757百万円、及び販売費及び一般管理費が6,844百万円それぞれ減少しています。また、棚卸資産が4,963百万円、及びその他の流動負債が4,963百万円それぞれ増加しています。

収益認識会計基準等を適用したため、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動資産」に表示していた「受取手形及び売掛金」は、当連結会計年度より「受取手形、売掛金及び契約資産」に含めて表示しています。

(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしました。これによる当連結会計年度の連結計算書類に与える影響はありません。

## 6. 会計上の見積りに関する注記

### (1) 市場措置（リコール等）に関連する債務

#### ①当連結会計年度の連結計算書類に計上した金額

	連結貸借対照表計上額
市場措置（リコール等）に関連する未払費用	12,822百万円

#### ②識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは、国内外の各工場で世界的に認められている厳格な品質管理基準に従って各種の製品を製造しています。品質の維持及び改善のため、当社グループは「品証・CS委員会」を通じて、不具合情報の早期発見と共有、品質向上のための全社横断的検討、全社的な品質マネジメントの運用状況の監視を実施しています。

当社グループでは、製品のリコール等が発生した際にその費用の支出に充てるために、未払費用を計上しています。

当該未払費用は、リコール等となる見積り対象台数に台当たり市場措置額を乗じることで算出しています。

リコール等に関連する債務の算出に用いた主要な仮定は、個別案件ごとの見積り対象台数、台当たり市場措置額です。

見積り対象台数は、主務官庁への届出等に基づく台数に個別の無償補修作業の実施率を考慮すること等によって算出をしています。台当たり市場措置額は、主務官庁への届出等に基づく個別の無償補修作業に必要となる部品代、作業工数等を見積ることによって算出しています。

これらについて、当社グループは個々のリコール等に対する実際の費用の発生状況を精査することによって継続的に見直しています。

当社グループは、リコール等に関連する債務について妥当な算定ができており、これまでの実際の結果と算定額に重要な乖離はありません。

しかしながら、リコール等に関連する債務の見積りにあたっては、主要な仮定の見積りにおいて不確実性が存在することから、実際のリコール等の費用が見積りの金額から乖離した場合等においては、見積り額の修正が必要となる可能性があります。

また、万が一大规模なリコール等を新たに実施する場合には、当社グループの業績及び財政状態に大きな悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 企業結合における無形固定資産への取得原価の配分

①当連結会計年度の連結計算書類に計上した金額

	勘定科目	連結貸借対照表計上額
UDトラックス株式会社の取得	のれん	20,280百万円
	商標権	18,974百万円
	特許権	18,435百万円
	顧客関連資産	5,673百万円

②識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは、当連結会計年度において、UDトラックス株式会社の全株式を取得しています。この企業結合により計上した無形固定資産およびのれんは、取得原価を企業結合日における識別可能な資産及び負債に配分し算定しています。

企業結合により識別した無形固定資産の時価については、外部の専門家を利用し、企業価値評価で用いられた事業計画を基礎に、無形固定資産から生み出すことが期待される将来キャッシュ・フローを割引くインカム・アプローチにより算出しています。

商標権及び特許権は、インカム・アプローチのうちロイヤリティ免除法を評価モデルとし、顧客関連資産は、インカム・アプローチのうち超過収益法を評価モデルとしています。

のれんについては、取得原価と無形固定資産等を含む企業結合日における識別可能な資産及び負債に対して配分した額との差額となります。

識別可能な無形固定資産の時価評価の算出に用いた主要な仮定は、商標権及び特許権については、ロイヤリティレート及び割引率並びに事業計画の中で加味される売上高の成長率です。また、顧客関連資産の算出に用いた主要な仮定は、期待収益率及び割引率です。

なお、無形固定資産に適用する割引率はWACC（加重平均資本コスト）を使用し、それぞれの無形固定資産のリスクの程度に応じて設定したリスクプレミアムを加算することによって設定しています。

当社グループは、企業結合時の無形固定資産の時価及びのれんの額の算定に用いた仮定は合理的であると考えています。

しかしながら、これらの仮定は、将来の不確実な経済条件の変動により影響を受ける可能性があります。仮定の見直しが必要となった場合には翌連結会計年度の連結計算書類の企業結合により取得した無形固定資産及びのれんの金額に重要な影響を与える可能性があります。



### (3) 有形固定資産の減損

#### ①当連結会計年度の連結計算書類に計上した金額

資産グループ	勘定科目	連結貸借対照表計上額
インドに拠点を置く製造・販売子会社	有形固定資産	5,864百万円

#### ②識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

新興国における物流需要および商用車市場の拡大を見込み、当社グループは一部の新興国市場を重点地域と定め、拡販活動を進めております。

当該新興国市場向けのC V・L C V製造のために海外子会社が取得した有形固定資産は、連結貸借対照表上、主に建物及び構築物、機械装置及び運搬具、土地として計上しております。

当社グループは、資産グループを事業用資産、遊休資産及び賃貸用資産に区分し、遊休資産及び賃貸用資産については、個々の物件ごとにグルーピングしております。

当該事業用資産及び賃貸用資産について、市場価格の下落、収益性の低下等により減損の兆候を把握した場合には、個別に回収可能性を検討しております。

有形固定資産の回収可能価額の決定にあたっては、使用価値または正味売却価額のいずれか高い方の金額としています。

使用価値の算定にあたっては、当該製造・販売子会社の経営者によって承認された事業計画を基礎として、資産グループから生じる将来キャッシュ・フローを見積り、これを現在価値に割引いています。将来キャッシュ・フローの算定に重要な影響を与える仮定は、主に市場における総需要やシェア並びに成長率です。また、使用価値の算定に重要な影響を与える仮定は割引率です。市場における総需要やシェア並びに成長率は、当社グループの過去の実績や外部情報機関による予測データを参考に、関係する市場動向や現時点で入手可能な情報に基づく経営環境の変化等を考慮しています。割引率は、WACC（加重平均資本コスト）を使用しています。

正味売却価額の算定にあたっては、資産又は資産グループの時価から処分費用見込額を控除して行っています。その時価は、第三者による鑑定評価額に基づき、原則として観察可能な市場価格に基づく価額としていますが、市場価格が観察できない場合には、陳腐化を加味したコスト・アプローチによって算定された価額など資産の特性等にしがって合理的に算定された価額としております。

なお、算定にあたっては、新型コロナウイルス感染症の感染拡大等に伴う不確実性を加味し、当連結会計年度の当該新興国市場の需要減少が翌連結会計年度以降継続することを前提としております。これらについて、当社グループは入手可能な最新の情報を基に継続的に見直しています。

当連結会計年度において、回収可能性の検討の結果、重要な減損損失は認識されていません。

自動車の需要は経済状況の影響を強く受けるため、景気後退及びそれに伴う市場における総需要

の縮小により将来の投資先の業績不振等が発生した場合、減損損失の計上が必要となる可能性があります。

各新興国市場の経済状況について、将来の不確実性が高まるような状況においては、会計上の見積りおよび仮定に重要な影響を及ぼし、当該新興国市場向けのCV・LCV製造のために子会社が取得した有形固定資産について減損をもたらすリスクがあります。

なお、前連結会計年度において有形固定資産の減損に係る重要な会計上の見積りを含むとしていた南アフリカに拠点を置くピックアップトラック等の製造・販売子会社について、当連結会計年度において、業績が改善したことから、翌連結会計年度に与える重要な影響はありません。

## 連結貸借対照表に関する注記

### 1. 担保資産

担保に供している資産

棚卸資産

98百万円

機械装置及び運搬具

4百万円

担保付債務

買掛金

4,352百万円

### 2. 有形固定資産の減価償却累計額

1,232,902百万円

### 3. 事業用土地の再評価

当社は、「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」（1999年3月31日 法律第24号）に基づき、事業用土地の再評価を行っています。この評価差額のうち、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しています。

再評価を行った事業用土地の当連結会計年度末における時価の合計額と再評価後の帳簿価額の合計額との差額は、62,588百万円です。

## 連結株主資本等変動計算書に関する注記

1. 当連結会計年度の末日における種類ごとの発行済株式の総数  
普通株式

777,442,069株

2. 剰余金の配当に関する事項

### (1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2021年6月25日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	14,768	20円00銭	2021年 3月31日	2021年 6月28日
2021年11月8日 取締役会	普通株式	利益剰余金	22,545	29円00銭	2021年 9月30日	2021年 11月30日

- (2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議予定	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額	基準日	効力発生日
2022年6月28日 定時株主総会	普通株式	利益剰余金	28,765	37円00銭	2022年 3月31日	2022年 6月29日

## 金融商品に関する注記

1. 金融商品の状況に関する事項

当社では、資金運用については預金の一部に限定し、また、資金調達については、主に銀行から借入及び、社債の発行を行っています。受取手形、売掛金及び契約資産にかかる顧客の信用リスクに関しては、当社の経理規程に従い、常に取引先に対する債権残高に注意をしています。投資有価証券は主に資本関係を有する企業の株式であり、当社の有価証券に関する規程に従い、時価を管理しています。デリバティブは、将来の市場価格の変動に対するリスクを回避するために、外貨建債権債務及び借入金の範囲で利用しています。

2. 金融商品の時価等に関する事項

2022年3月31日（当連結会計年度末）における連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりです。なお、市場価格のない株式等は、次表には含まれていません。（（注）参照）

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額 (※2)	時価 (※2)	差額
(1) リース債権及び リース投資資産	190,522	190,290	(232)
(2) 投資有価証券 (※3)	182,054	170,022	(12,032)
(3) 社債	(80,000)	(79,611)	389
(4) 長期借入金 (※4)	(369,710)	(368,682)	1,027
(5) デリバティブ取引 (※5)	(1,441)	(1,441)	—

(※1)「現金及び預金」、「受取手形、売掛金及び契約資産」、「支払手形及び買掛金」、「電子記録債務」、「短期借入金」及び「未払費用」については、現金及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから記載を省略しています。

(※2)負債に計上されているものについては、( )で示しています。

(※3)投資有価証券には、持分法適用の上場関連会社株式を含めており、差額は当該株式の時価評価によるものです。

(※4)長期借入金については、1年内返済予定の長期借入金も含めて示しています。

(※5)デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しています。

(注)市場価格のない株式等は、「(2) 投資有価証券」には含めていません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりです。

区分	当連結会計年度 (百万円)
非上場株式	2,009
非連結子会社及び関連会社	65,768

### 3. 金融商品の時価の適切な区分ごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しています。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定された時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しています。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券	156,265	－	641	156,907
資産計	156,265	－	641	156,907
デリバティブ取引				
通貨関連	－	(1,441)	－	(1,441)
負債計	－	(1,441)	－	(1,441)

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している以外の金融商品

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
リース債権及びリース投資資産	－	－	190,290	190,290
投資有価証券	13,114	－	－	13,114
資産計	13,114	－	190,290	203,404
社債	－	(79,611)	－	(79,611)
長期借入金	－	(368,682)	－	(368,682)
負債計	－	(448,293)	－	(448,293)

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

リース債権及びリース投資資産

一定の期間ごとに区分した債権を、満期までの期間及び信用リスクを加味した利率により割引いた現在価値によって算定しており、レベル3の時価に分類しています。

投資有価証券

上場株式の時価については、活発な市場における相場価格に基づき算定しており、レベル1の時価に分類しています。また、非上場株式の時価については、純資産価値に基づく評価技法等により算定しており、レベル3の時価に分類しています。

#### 社債

相場価格に基づき算定しており、レベル2の時価に分類しています。

#### 長期借入金

元利金の合計額を同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いて算定しており、レベル2の時価に分類しています。

#### デリバティブ取引

取引先金融機関から提示された価格等に基づき算定しており、レベル2の時価に分類しています。

## 賃貸等不動産に関する注記

金額的重要性がないため省略しています。

## 収益認識に関する注記

(1) 顧客との契約から生じる収益を分解した情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、以下のとおりです。

(単位：百万円)

	大型・中型車	小型車他	海外生産用 部品	エンジン・コ ンポーネン ト	その他	合計
国内	298,105	96,568	-	58,296	325,864	778,833
海外	264,579	1,067,255	54,926	112,093	137,094	1,635,948
顧客との契約か ら認識した収益	562,684	1,163,823	54,926	170,390	462,958	2,414,782
その他の源泉か ら認識した収益						99,508
合計						2,514,291

(注) その他には部品の販売、整備・サービス及び中古車の販売等が含まれています。

(2) 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報

当社グループは、大型・中型車、小型車他を中心としたCV・LCV及びパワートレイン等を販売しており、国内、海外の販売会社及び需要者を顧客としています。

海外生産用部品は、現地生産を行っている在外グループ会社を顧客としています。

エンジンは、主に産業用エンジンを販売しており、国内及び海外の産業機械メーカーを顧客としています。

コンポーネントは、グループ会社を含む海外のメーカーを主な顧客としています。

当社グループは、販売手数料等の顧客に支払われる対価の一部について、取引価格から減額しています。

製品の販売及びサービスの提供に係る対価は、製品に対する支配が顧客に移転してから概ね1年以内に受領しており、重要な金融要素は含んでいません。

(注) 文中「CV」「LCV」「パワートレイン」とあるのはそれぞれ「商用車」「ピックアップトラック及び派生車」「エンジン、トランスミッション及び駆動系のコンポーネント」のことを示します。



(3) 当連結事業年度及び翌連結事業年度以降の収益の金額を理解するための情報

① 契約残高

顧客との契約から生じた債権及び契約負債の期首残高及び期末残高は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	当連結会計年度期首 (2021年4月1日)	当連結会計年度末 (2022年3月31日)
顧客との契約から生じた債権 (注) 1	325,354	360,788
契約負債 (注) 2	10,709	10,289

(注) 1 連結貸借対照表の受取手形、売掛金及び契約資産に含まれています。なお、貸倒引当金控除前の金額です。

(注) 2 連結貸借対照表のその他（流動負債）に含まれています。

契約負債は主に、製品の引渡前に当社グループが顧客から受け取った対価であり、当社グループが履行義務を充足した時点で収益に振り替えられます。

当連結事業年度において認識した収益のうち、期首の契約負債残高に含まれていたものは、5,934百万円です。

なお、当連結会計年度において、過去の期間に充足（又は部分的に充足）した履行義務から認識した収益の額に重要性はありません。

② 残存履行義務に配分した取引価格

当連結事業年度末における未充足の履行義務に配分された取引価格の総額及び収益の認識が見込まれている期間別の内訳は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	当連結会計年度末 (2022年3月31日)
1年以内	79,896
1年超	44,745
合計	124,641

上記の表には、実務上の便法を適用し、当初の予想期間が1年以内の残存履行義務に関する情報は含めていません。

## 企業結合等関係に関する注記

### 取得による企業結合

当社は、2021年4月1日付で、UDトラックス株式会社の全株式を取得しました。

#### 1. 企業結合の概要

##### (1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 UDトラックス株式会社（以下「UD社」）

事業の内容                   トラックの開発・生産・輸出・販売、自動車用部品の製造・販売

##### (2) 企業結合を行った主な理由

自動車業界は、100年に一度といわれる大変革期に直面しており、特に商用車の分野においては、物流業界におけるさまざまな課題や、世界各地のお客様の幅広いニーズに応えるために、先進技術への対応を含めた新たなソリューションの創出が求められています。

当社は、このような課題を共有したAktiebolaget Volvo（以下「AB Volvo社」、本社：スウェーデン・イエテボリ）との間で、2020年10月30日に締結した商用車分野における戦略的提携に関する基本契約を基に、それぞれが得意とする領域を相互に補完しながら、お互いの持つ優れた技術とスケールメリットを活かし、商用車における既存技術及び先進技術開発の協業を進めてまいります。

この戦略的提携の第一弾として、当社は、日本及び海外市場における大型トラックビジネスの更なる事業強化と戦略的協業効果の迅速な実現を図るため、AB Volvo社が保有するUD社の株式の全てを譲り受けました（以下「本件株式取得」）。

当社は、今後UD社と共に、AB Volvo社との更なる強固な関係に基づき、長期にわたりシナジーを創出し、物流の将来課題の解決を目指してまいります。

##### (3) 企業結合日

2021年4月1日

##### (4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

##### (5) 結合後企業の名称

変更ありません。

##### (6) 取得する議決権比率

100.0%

##### (7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金を対価として全株式を取得したことによるものです。

##### (8) その他取引の概要に関する事項

本件株式取得に伴い、UD社傘下の子会社14社及び関連会社3社についても当社のグループ企業となりました。

#### 2. 連結計算書類に含まれている被取得企業の業績の期間

2021年4月1日から2021年12月31日まで

3. 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	56,898百万円
条件付取得対価	現金	1,880百万円
取得原価		58,778百万円

(注) 取得の対価については、株式譲渡契約に基づく価格調整を反映させた金額です。また、当該株式譲渡契約には、事業計画の達成度合いに応じて15,000百万円を上限とする条件付取得対価に関する合意が含まれています。

なお、UD社及びその傘下の子会社のAB Volvo社のグループ会社に対する借入金（261,534百万円）について当社が代位弁済したことにより、今回、AB Volvo社への支払額は、株式取得の対価とあわせて320,312百万円となります。

4. 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザリーに対する報酬・手数料等 1,810百万円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

(1) 発生したのれん

22,716百万円

(2) 発生原因

今後の事業展開によって期待される将来の超過収益力です。

(3) 償却方法及び償却期間

7年にわたる均等償却

6. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	207,415百万円
固定資産	206,156百万円
資産合計	413,571百万円
流動負債	353,245百万円
固定負債	24,263百万円
負債合計	377,508百万円

7. 企業結合契約に規定される条件付取得対価の内容及び当連結会計年度以降の会計処理方針

株式譲渡契約には、被取得企業の将来の事業計画の達成度合いに応じて15,000百万円を上限とする条件付取得対価を追加で支払う合意が含まれています。また、取得対価の追加支払が発生した場合には、取得時に支払ったものとみなして取得価額を修正し、のれん

8. のれん以外の無形資産に配分された金額及びその主要な種類別の内訳並びに加重平均償却期間

(1) 無形固定資産に配分された金額

46,755百万円

(2) 主要な内訳並びに償却期間

商標権 20,513百万円 償却期間 10年

特許権 20,342百万円 償却期間 8年

顧客関連資産 5,900百万円 償却期間 20年

9. 企業結合が連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額及びその算定方法

売上高 67,047百万円

営業利益 1,052百万円

(概算額の算定方法)

企業結合が連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の企業結合日まで（2021年1月1日から2021年3月31日）の被取得企業の売上高及び損益情報を基礎として影響の概算額を算定しています。また、企業結合時に認識されたのれん等が当期首に発生したのものとして、影響の概算額を算定しています。

なお、当該注記は監査証明を受けていません。

#### 1 株当たり情報に関する注記

1 株当たり純資産額 1,540円51銭

1 株当たり当期純利益 162円87銭

#### 重要な後発事象に関する注記

該当事項はありません。

# 株主資本等変動計算書 (2021年4月1日から2022年3月31日まで)

(単位：百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金		自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	40,644	49,855	—	49,855	486,749	486,749	△54,060	523,189
事業年度中の変動額								
剰余金の配当					△37,314	△37,314		△37,314
当期純利益					88,928	88,928		88,928
自己株式の取得							△2,258	△2,258
自己株式の処分			△10,109	△10,109			53,059	42,949
土地再評価差額金の取崩					△71	△71		△71
利益剰余金から 資本剰余金へ振替			10,109	10,109	△10,109	△10,109		—
株主資本以外の項目の事業 年度中の変動額 (純額)								
事業年度中の変動額合計	—	—	—	—	41,432	41,432	50,800	92,233
当期末残高	40,644	49,855	—	49,855	528,182	528,182	△3,259	615,422

	評価・換算差額等				純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	評価・換算 差額等合計	
当期首残高	51,512	△796	83,881	134,597	657,786
事業年度中の変動額					
剰余金の配当					△37,314
当期純利益					88,928
自己株式の取得					△2,258
自己株式の処分					42,949
土地再評価差額金の取崩					△71
利益剰余金から 資本剰余金へ振替					—
株主資本以外の項目の事業 年度中の変動額 (純額)	1,843	△305	71	1,608	1,608
事業年度中の変動額合計	1,843	△305	71	1,608	93,842
当期末残高	53,355	△1,102	83,952	136,205	751,628

(注) 記載金額は、百万円未満を切り捨てて表示してあります。

## 個別注記表

### 重要な会計方針に係る事項に関する注記

1. 有価証券の評価基準及び評価方法
  - (1) 子会社株式及び関連会社株式 移動平均法による原価法（一部について評価減を行っています）
  - (2) その他有価証券
    - ①市場価格のない株式等以外のもの 時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）
    - ②市場価格のない株式等 移動平均法による原価法
2. デリバティブの評価基準及び評価方法 時価法
3. 棚卸資産の評価基準及び評価方法 総平均法による原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）
4. 固定資産の減価償却の方法
  - (1) 有形固定資産  
（リース資産を除く） 定額法。なお、取得価額が10万円以上20万円未満の資産については、3年間で均等償却しています。
  - (2) 無形固定資産  
（リース資産を除く） 定額法。なお、無形固定資産に含まれる「ソフトウェア」の減価償却方法は、社内における利用可能期間（5年間）に基づく定額法によっています。
  - (3) リース資産 所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法を採用しています。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取り決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のは零としています。
5. 重要な引当金の計上基準
  - (1) 貸倒引当金 売上債権、貸付金等の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しています。
  - (2) 賞与引当金 従業員の賞与支給に充てるための引当であり、当事業年度に負担すべき支給見込額を計上しています。
  - (3) 役員賞与引当金 役員の賞与支給に充てるための引当であり、当事業年度に負担すべき支給見込額を計上しています。

- (4) 製品保証引当金 製品のアフターサービスに対する費用の支出に充てるための引当であり、保証書の約定に従い、過去の実績を基礎にして計上しています。
- (5) 退職給付引当金 従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき当事業年度末において発生していると認められる額を計上しています。なお、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっています。過去勤務費用は、発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（1年）による定額法により費用処理しています。数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額をそれぞれ発生翌事業年度から費用処理することとしています。
- (6) 役員株式給付引当金 取締役等への当社株式の給付に充てるための引当であり、当事業年度に負担すべき給付見込額を計上しています。
6. 重要な外貨建の資産または負債の本邦通貨への換算基準  
外貨建債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しています。
7. 重要なヘッジ会計の方法
- (1) ヘッジ会計の方法
- a. 為替予約及び通貨オプション  
振当処理（要件を満たしていないものを除く）
- b. 金利スワップ、金利オプション  
繰延ヘッジ処理または金融商品に関する会計基準に定める特例処理
- (2) ヘッジ手段とヘッジ対象
- a. ヘッジ手段  
金利スワップ、金利オプション、為替予約取引、通貨オプション
- b. ヘッジ対象  
外貨建債権債務、借入金
- (3) ヘッジ方針  
当社は、将来の市場価格の変動に対するリスクヘッジとしてデリバティブ取引を導入しており、外貨建債権債務、借入金の範囲で利用しています。
- (4) ヘッジ有効性評価の方法  
ヘッジ手段の変動額の累計額とヘッジ対象の変動額の累計額を比較して有効性の判定を行っています。ただし、特例処理によっている金利スワップについては有効性の評価を省略しています。

(5) その他

当社内にはデリバティブ取引に関する内規があり、内規には取引の目的、内容、保有限度、報告体制等を定めており、これに基づいて取引及びリスク管理を行っています。

8. 収益及び費用の計上基準

当社は国内外において、大型トラック・バス（以下「大型・中型車」）、小型トラック（以下「小型車」）といったCVのほか、海外生産用部品並びにエンジン、トランスミッション及び駆動系のコンポーネントを中心としたパワートレイン（以下「エンジン・コンポーネント」）、部品の販売を主要な事業としています。

国内向けの大型・中型車、小型車、エンジン・コンポーネント及び部品等の販売については、顧客が当該製品に対する支配を獲得し履行義務が充足される、引渡時等に収益を認識しています。

海外向けの大型・中型車、小型車、海外生産用部品、エンジン・コンポーネント及び部品等の販売については、顧客が当該製品に対する支配を獲得し履行義務が充足される、製品を船積みした時点等に収益を認識しています。

9. 繰延資産の処理方法

支出時に全額費用として処理する方法を採用しています。

10. その他計算書類作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結計算書類におけるこれらの会計処理の方法と異なっています。

11. 会計方針の変更

（収益認識に関する会計基準等の適用）

「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 2020年3月31日。以下「収益認識会計基準」という。）等を当事業年度の期首から適用し、約束した財又はサービスの支配が顧客に移転した時点で、当該財又はサービスと交換に受け取ると見込まれる金額で収益を認識しています。

これにより、従来は販売費及び一般管理費として計上していた販売手数料等の顧客に支払われる対価の一部について、取引価格から減額する方法に変更しています。また、当社の子会社が代理人として行う取引について、従来は顧客から受け取る対価の総額を収益として認識していましたが、顧客から受け取る額から仕入先に支払う額を控除した純額で収益を認識することとしています。

この結果、当事業年度の売上高が7,910百万円、売上原価が4,712百万円、及び販売費及び一般管理費が3,198百万円それぞれ減少しています。



(時価の算定に関する会計基準等の適用)

「時価の算定に関する会計基準」(企業会計基準第30号 2019年7月4日。以下「時価算定会計基準」という。)等を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準第19項及び「金融商品に関する会計基準」(企業会計基準第10号 2019年7月4日)第44-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準等が定める新たな会計方針を、将来にわたって適用することとしました。これによる当事業年度の計算書類に与える影響はありません。

## 12. 会計上の見積りに関する注記

### (1) 市場措置(リコール等)に関連する債務

#### ①当事業年度の計算書類に計上した金額

	貸借対照表計上額
市場措置(リコール等)に関連する未払費用	8,020百万円

#### ②識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

①の金額の算出方法は、「連結注記表 連結計算書類作成のための基本となる重要な事項に関する注記 6. 会計上の見積りに関する注記 (1)市場措置(リコール等)に関連する債務」の内容と同一のため、注記を省略しています。

### (2) 関係会社株式等の減損

#### ①当事業年度の計算書類に計上した金額

投資先	貸借対照表計上額
インドに拠点を置く製造・販売子会社の出資金	3,402百万円

#### ②識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社は新興国を含む多様な国に事業投資を行っています。関係会社株式等について、発行会社の財政状態の悪化により、実質価額が著しく低下し、かつ回復可能性が十分な証拠によって裏付けられない場合は、関係会社株式等に対する減損処理を行い、実質価額をもって貸借対照表価額としています。

関係会社株式等の実質価額は、原則として一般に公正妥当と認められる会計基準に準拠して作成された発行会社の直近の計算書類にその後の状況で財政状態に重要な影響を及ぼす事項を加えたものを基礎に、資産等の時価評価に基づく評価差額等を加味した1株当たりの純資産額に所有株式数を乗じることにより算定しています。

関係会社株式等について、実質価額が著しく低下したときとは、実質価額が取得価額に比べて50%程度以上低下した場合としています。

回復可能性の判定が必要な場合は、事業計画等による回復可能性の判定を行います。回復可能性の判定に用いる事業計画の見積りに重要な影響を与える仮定は、主に市場における総需要やシェアです。これらについて、当社は入手可能な最新の情報を基に継続的に見直しています。

回復可能性の判定を行った結果、実質価額が著しく低下し、かつ回復可能性が十分な証拠によって裏付けられない関係会社株式等については、取得価額を実質価額まで減額します。

当事業年度において、実質価額が著しく低下し、かつ回復可能性の判定が必要な重要な関係会社株式等はありません。

自動車の需要は経済状況の影響を強く受けるため、景気後退及びそれに伴う市場における総需要の縮小により将来の投資先の業績不振等が発生した場合、減損損失の計上が必要となる可能性があります。

なお、前事業年度において関係会社株式等の減損に係る重要な会計上の見積りを含むとしていた南アフリカに拠点を置くピックアップトラック等の製造・販売子会社について、当事業年度において、業績が改善したことから、翌事業年度に与える重要な影響はありません。

### 貸借対照表に関する注記

1. 有形固定資産の減価償却累計額	523,719百万円
2. 関係会社に対する金銭債権債務	
短期金銭債権	315,829百万円
長期金銭債権	127,928百万円
短期金銭債務	102,190百万円
長期金銭債務	190百万円

### 3. 事業用土地の再評価

「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」（1999年3月31日 法律第24号）に基づき、事業用土地の再評価を行っています。この評価差額のうち、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しています。

再評価を行った事業用土地の当事業年度末における時価の合計額と再評価後の帳簿価額の合計額との差額は、62,588百万円です。

### 損益計算書に関する注記

関係会社との取引高	
売上高	904,061百万円
仕入高	308,445百万円
販売費及び一般管理費	111,732百万円
営業取引以外の取引高	62,824百万円

### 株主資本等変動計算書に関する注記

当事業年度の末日における自己株式の種類と数

普通株式	2,259,815株
------	------------

（注）自己株式数には、取締役等を受益者とする信託が保有する2,251,865株を含めています。

## 税効果会計に関する注記

### 1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	
未払費用見積計上	5,565百万円
製品保証引当金	1,733百万円
賞与引当金	3,076百万円
未払事業税	752百万円
棚卸資産評価減	781百万円
退職給付引当金	14,945百万円
投資評価減	13,980百万円
資産除去債務	666百万円
その他	6,717百万円
評価性引当額	△16,675百万円
繰延税金資産合計	31,542百万円
繰延税金負債	
その他有価証券評価差額金	21,704百万円
資産除去債務に対応する除去費用	88百万円
受取配当金	641百万円
繰延税金負債合計	22,434百万円
繰延税金資産の純額	9,108百万円

### 2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主要な項目別の内訳

法定実効税率	30.6%
(調整)	
評価性引当額の増減等	△1.0%
外国源泉税額	4.4%
受取配当益金不算入	△18.3%
税額控除	△10.2%
その他	△3.7%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	9.0%

## 関連当事者との取引に関する注記

子会社

会社等の名称	議決権等の 所有・ 被所有割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
いすゞ自動車販売(株)	直接 75.0%	製品の販売	車両・部品の販売 (注1)	340,130	売掛金	75,085
いすゞ自動車 インターナショナルFZE	直接 100.0%	製品の販売	車両・部品の販売 (注1)	68,042	売掛金	16,128
いすゞオーストラリアリミテッド	直接 100.0%	製品の販売	車両・部品の販売 (注1)	72,155	売掛金	14,976
UDトラックス(株)	直接 100.0%	資金の貸付 役員の兼任	資金の貸付 (注2)	150,167	短期貸付金	111,849
			資金の回収	38,318		
			資金の貸付 (注2)	135,300	長期貸付金 (注3)	135,300
(株)IJTT	直接 43.2% 間接 0.1%	エンジン/駆動関係の鍛造 部品・鋳造部品の購入	原材料の購入 (注1)	127,435	買掛金	21,566

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注1) 価格その他の取引条件は、市場価格等を十分に勘案し、交渉の上で決定しています。

(注2) 資金の貸付については、市場金利を勘案し利率を合理的に決定しております。また短期貸付金の一部については、CMS（キャッシュ・マネジメント・システム）による取引であります。

(注3) 長期貸付金については、1年内回収予定の長期貸付金を含めております。

## 収益認識に関する注記

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報について、「連結注記表【収益認識に関する注記】」に同一の内容を記載しておりますので注記を省略しております。

## 企業結合に関する注記

「連結注記表【企業結合に関する注記】」に記載しているため、注記を省略しています。

## 1株当たり情報に関する注記

1株当たり純資産額	969円62銭
1株当たり当期純利益	114円77銭

**重要な後発事象に関する注記**  
該当事項はありません。

以 上